

# 歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

◎十二月十一日(第三回)

(佐藤 紀之)

雨だれの 音を聴きつつ 池の中 浮きつ沈みつ 紅葉漂う  
日の翳り 路上に映る 我が影の 薄きにひやと 悲しみ過ぎる  
アイラブユー 指でなぞりし 窓の外 文字の向こうに 隣家の団欒  
てんとちを しめすおしゃかの ほほえみは かわらぬけれど われはとしふる  
せんこうの けむりたちゆく そのさきに おじひのまなこ われにそそげる

(佐藤 亮照)

とりどりの 色なす小さき もみじ葉の 幹の大きさに 寺史を想えり  
北風に 散りゆくもみじ 掃き清め あの賑わいを 翌年もまた  
堂庭に ポタンポトンと 地をたたき 夢中にさせる 銀杏の実

(佐藤 志亮)

晩秋に 季節重なり 雪もみじ 見上げる山に 三度目の雪

(松田 昌泰)

芦ノ湖の 湖面に映える 赤鳥居 雲間にのぞく 富士も負けじと  
紅葉狩り 渋滞続く 箱根路に 待ち焦がれるは 大学駅伝

(黒沼 貞志)

朝光に 都のもみじ 透かし見ゆ 越えし時空は 三百有余  
三百坊 静かに佇む 石鳥居 眼を閉し想う 遙かな歴史

ハイキング 落葉の音と 鈴の音に 想い起こせし ふたりの歴史あゆみ  
ひさびさに 会話を交わす 落ち紅葉 絨毯と見紛う 山の道

説明板 記載の歴史は 霧の中 想いを馳せる 遙かな時空

枯れ野原 春の彩り まぼろしか 佇むわれに 秋の訪れ

(中村 昌平)

庭の鯉 日が進むごと 数減らす 手に残る水 語る喪失